2．中高一貫カリキュラムの評価と課題
キャリアアンケートから見た生徒像
キャリアアンケート報告

佐　藤　俊　樹

はじめに

名古屋大学教育学部附属中・高等学校では、平成12年度より『「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」という主題で』文部省（現在は文部科学省）の指定を受け、研究開発を行っている。

研究開発の第２年次にあたり、授業を受ける側にある生徒のキャリア意識をさぐるために中・高６学年全生徒を対象にして、2001（平成13）年７月に『「キャリア」に対する考え方アンケート』を行った。アンケート作成にあたっては、本校の運営指導委員である愛知教育大学職業指導教室の坂柳恒夫教授の「中学生の進路成熟に関する縦断的研究（坂柳1992）」「高校生の進路成熟に関する縦断的研究（坂柳1993）」を参考にして、質問項目を考えた。実際に生徒の手に渡り、回答してもらったアンケート用紙が次ページの資料である。アンケート結果の検討は、因子分析（主成分法・プロマックス回転）やｔ検定によって行った。

なお本稿は、前校長で名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授の速水敏彦氏および、教育発達科学研究科博士後期課程の久木山健一氏のご協力のもとで執筆した、名古屋大学大学院教育発達科学研究科「中等教育センター紀要第２号」に掲載された文章と同じものである。

１．各種の差の検討

生徒をはっきりとした差で分類し、その差の検討を行った。差というのは、⑴附属中学出身者とそうでない者の差（高校生のみ対象）、⑵性差および学年差である。なお、これらの差を検討する測度として、以下のように設定し命名した。

・「キャリア（教育）」に対する意識：
　　アンケート用紙のⒶの項目
・「キャリア（職業）」に対する意識：
　　アンケート用紙のⒷの項目
・「キャリア（人生）」に対する意識：
　　アンケート用紙のⒸの項目
・「キャリア」に対する考え方に影響を与える諸活動16活動　：　アンケート用紙のⒹの項目

⑴各測度の附属中学出身者・非附属中学出身者での相違の検討

キャリア（教育）に関してのみ有意な差が見られた。すなわち、入学時には附属中学出身者の方が高いが、学年を経るごとに差がなくなっていくという変化が読みとれた。（図１）

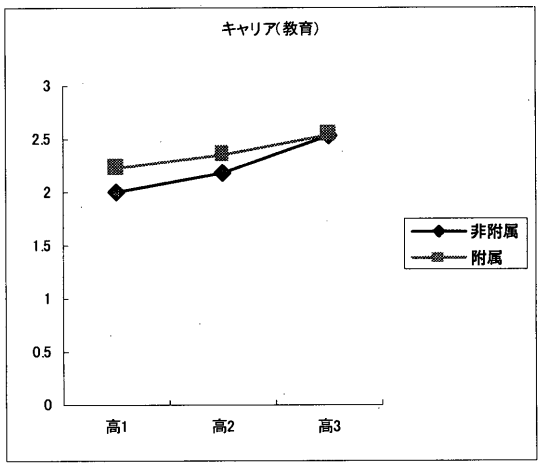

図　1

⑵各測度の性差・学年差の検討

①「キャリア（教育・職業・人生）」についての意識に関する尺度について

全般的にすべてのキャリア意識が学年が上になるにしたがって高まる傾向があることが確認された。また、ほぼすべての学年において女子の方が男子よりも意識が高いということも確認された。ただ、中学３年生において、意識が上昇しない「中だるみ」があるように見うけられた。（図２～４）

「キャリア」に対する考え方アンケート

中学　　年　　組　　番　氏名

「キャリア career」ということばの意味はなかなか難しく、「進路」とか「職業選択」という単純なものから、もっと広く「自分の人生をどう築き上げていくか」という大きいものまでさまざまです。本校の総合人間科では、幅広く「人生をデザインする」という意味でとらえています。

また、時間をものさしにして、過去から現在にいたる「経歴」（形成されたキャリア）と、現在から未来にかけての「進路」（形成していくキャリア）の2つのキャリアがあるという見方もあります。

このアンケートは、皆さんが各学年段階で自分の進路や人生についてどのように考えているかをさぐるためのものです。

個人名は公表しませんので、記名の上、ありのままに答えて下さい。

Ⅰ．あなたのキャリア（教育・職業・人生）について、自分自身でどのように感じているか聞きます。
以下の各項目について、あてはまるものを○印で囲んでください。

	意味がわからない	あてはまらない	どちらともいえない	あてはまる
A				
1 進学のための勉強は、自分から進んでしている。	0	1	2	3
2 どんな種類の学校や学科があるのか、気にしている。	0	1	2	3
3 志望校に進学するための計画を立てて、準備をしている。	0	1	2	3
4 進学のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。	0	1	2	3
5 進学先は、自分の意志で決めている。	0	1	2	3
6 何のために進学するのかを考えている。	0	1	2	3
7 志望校に進学するための道筋が、わかっている。	0	1	2	3
8 自分を生かせる進学先について調べている。	0	1	2	3
B				
1 将来の職業の準備は、自分から進んでしている。	0	1	2	3
2 どんな種類の職業や産業があるのか、気にしている。	0	1	2	3
3 将来、職業につくための計画を立て、準備している。	0	1	2	3
4 職業を選ぶことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。	0	1	2	3
5 将来の職業については、自分の意志で決めている。	0	1	2	3
6 何のために就職するのかを考えている。	0	1	2	3
7 希望する職業につくための道筋が、わかっている。	0	1	2	3
8 自分を生かせる職業について、調べている。	0	1	2	3
C				
1 これからの人生を豊かにするために努力している	0	1	2	3
2 どんな人生や生き方があるのか、関心がある。	0	1	2	3
3 これからの人生のことを考えて、自分なりに人生設計を立てている	0	1	2	3
4 人生のことについて、人にたずねたり、本で調べたりしている。	0	1	2	3
5 これからの人生は、自分の力で切り開いていく。	0	1	2	3
6 人生の意味について考えている。	0	1	2	3
7 これからの人生について、見通しを立てている。	0	1	2	3
8 自分にふさわしい生き方を、いろいろと考えている。	0	1	2	3

D 自分の将来を考えるうえで、次のようなことはどの程度役に立っていると思いますか。

	まったく役立たない	少し役立つ	大いに役立つ
1 各教科・科目の授業	1	2	3
2 総合人間科の授業	1	2	3
3 宿泊行事（研究旅行・林間学校）	1	2	3
4 部活動	1	2	3
5 生徒会活動（学校祭など）	1	2	3
6 先生とのかかわり	1	2	3
7 先輩とのかかわり	1	2	3
8 友人とのかかわり	1	2	3
9 父親とのかかわり	1	2	3
10 母親とのかかわり	1	2	3
11 読書・小説	1	2	3
12 新聞・雑誌の記事	1	2	3
13 テレビ・映画	1	2	3
14 マンガ	1	2	3
15 演劇やコンサート	1	2	3
16 スポーツの試合	1	2	3

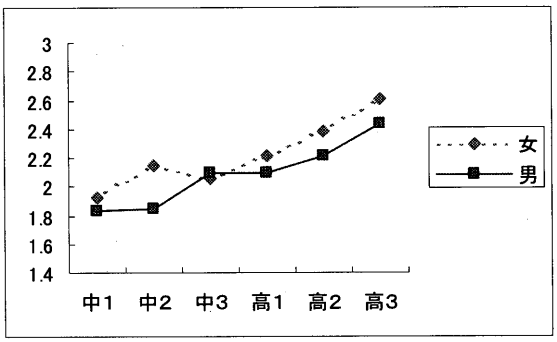

図　2　キャリア（教育）に関する意識

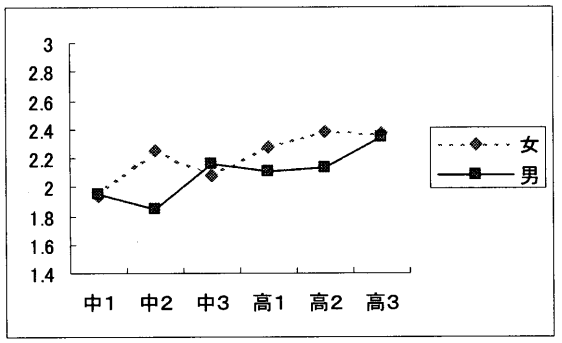

図　3　キャリア（職業）に関する意識

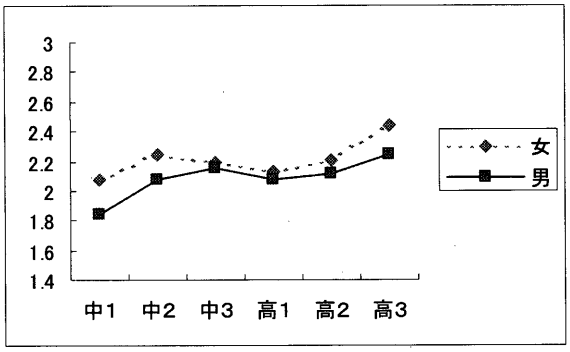

図　4　キャリア（人生）に関する意識

②「キャリア」に対する考え方に影響を与える諸活動16活動について

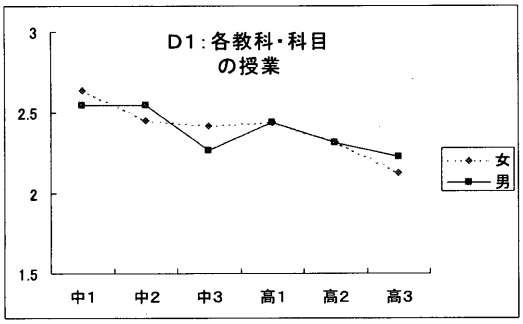

図　5

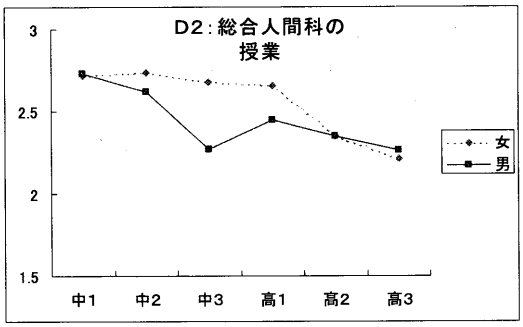

図　6

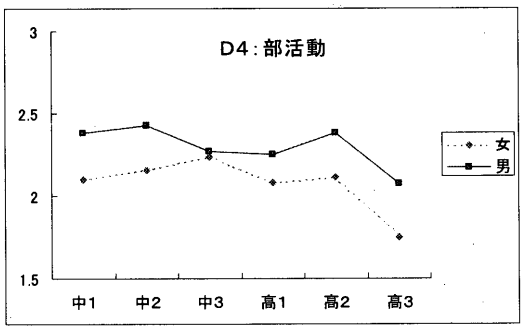

図　7

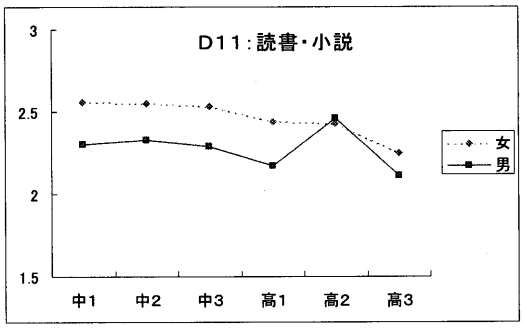

図　8

図５～８に16尺度のうちの４項目の結果を示した。項目４「部活動」では男子が、項目11「読書・小説」では女子がいずれも優位であるという性差が見てとれる。このほかにも、男子が優位な項目として「スポーツの試合」が、女子が優位な項目として「母親との関わり」・「演劇やコンサート」があげられる。項目２「総合人間科の授業」は中２から高１にかけて女子が優位であることも見出される。

学年差に関しては、項目８「友人との関わり」および項目16「スポーツの試合」に関してのみ学年差が見られない以外は確認された。ただ、図５～８から読みとれるように、高校生で学年が進行するにしたがっていずれの意識も低下する傾向がある。最終学年として自らの進路を真剣に考えている彼らの姿からすると、意外な結果である。さらなる分析の必要性を感じる。

2. キャリア意識と影響する諸活動との関連の検討

(1)各キャリア意識間の関連

各キャリア意識のあいだにどのような関連があるかを検討するために相関係数を求めた。(表1)
その結果、各キャリア意識のあいだには比較的高い相関が見られることが確認された。特にキャリア（教育）はキャリア（意識）との結びつきが高い傾向にあると考えられる。

表　1

	キャリア(教育)	キャリア(職業)
キャリア(職業)	.76	
キャリア(人生)	.62	.63

(2)各キャリア意識と諸活動16活動との関連

アンケート用紙の回の16項目を、「まったく役立たない」1点、「少し役立つ」2点、「大いに役立つ」3点として点数化し、項目ごとの順位を出したのが表2である。

表　2

	D1	D2	D3	D4	D5	D6	D7	D8	D9	D10	D11	D12	D13	D14	D15	D16
中学男子	8	2	7	10	13	9	4	1	6	5	11	3	12	15	15	14
中学女子	9	1	10	14	13	7	6	2	8	3	4	5	11	16	12	15
高校男子	8	6	12	11	15	5	9	1	3	4	10	2	7	16	14	13
高校女子	10	4	11	13	14	5	8	1	7	2	6	3	9	15	12	16

ここから見ると、総合人間科の授業（D2）は中学生においては役に立つと思われることが多いが、高校になるとそれほどでもなくなることや、読書・小説（D11）に関しては、女子の方では中高別にかかわらず男子より役に立つと考えていること、テレビ・映画（D13）に関しては中学校より高校において役に立つと思われる相対的位置が高くなることなどが読みとれる。

さらに、諸活動に対して役立つと思うか思わないかという、諸活動に対する度合いの認知と各キャリア意識との間の関連の検討を行った。被験者の回答状況より、諸活動の役立ち認知の各質問に対して「大いに役立つ」と答えた者を役立ち認知度高群とし、「少し役立つ」「まったく役に立たない」と答えた者を役立ち認知度低群とした。(表3)

表　3

中高別・性別の諸活動の役立ち度高群・低群の人数
高群：「大いに役立つ」と回答　低群：「少し役立つ」「まったく役立たない」と回答

	中学生				高校生			
	女子		男子		女子		男子	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群
D1：各教科・科目の授業	54	61	62	61	113	63	89	64
D2：総合人間科の授業	29	86	50	73	94	83	79	73
D3：宿泊活動（研究旅行・林間学校）	64	51	59	63	119	58	95	57
D4：部活動	79	36	64	59	123	49	85	66
D5：生徒会活動（学校祭など）	69	45	83	40	136	40	113	38
D6：先生との関わり	49	65	60	63	99	78	81	71
D7：先輩との関わり	48	65	55	67	97	80	79	73
D8：友人との関わり	33	82	42	81	55	122	56	96
D9：父親との関わり	48	65	56	67	94	80	73	78
D10：母親との関わり	39	76	55	68	77	99	78	74
D11：読書・小説	47	68	70	53	92	84	83	68
D12：新聞・雑誌の記事	51	64	54	69	83	92	70	81
D13：テレビ・映画	75	40	74	49	101	74	87	65
D14：マンガ	97	18	100	23	141	34	108	44
D15：演劇やコンサート	69	46	94	29	129	47	109	43
D16：スポーツの試合	87	28	80	43	147	29	99	52

さらに高群・低群それぞれにおいて各キャリア意識（教育・職業・人生）がどのように異なるのかの検討を行うためにｔ検定を行った。全般的にみると、高低群で有意な差がみられたものは、中高別・性別に関わらずすべて高群の方が低群よりキャリア意識が高いことが見出された。このことにより、さまざまな活動を「将来を考えるうえで役に立つ」と考えている者は、その活動の種類に関わらず様々なキャリア意識を高めていることが確認された。

また、キャリア意識の種類に関わらず、中学生女子においては中学生男子、高校生にくらべて諸活動の役立ち度の認知の高低によって、各キャリア意識の得点に高低差がみられることが少ないことを読みとることができる。キャリア意識の得点自体は女子の方が男子にくらべて高いことが示されていることから、中学生女子においては諸活動の役立ち度の認知以外の要因が、各キャリア意識の高低の決定に関連があることが考えられる。

諸活動別にみていくと、いずれのキャリア意識においても差が見られたものとしては、読書・小説（Ｄ11）、先生との関わり（Ｄ６）、新聞・雑誌の記事（Ｄ12）があげられる。総合人間科の授業（Ｄ２）に関しては、キャリア意識（教育）に関しては差があまり見られなかったが、キャリア意識（職業）およびキャリア意識（人生）においては多く差が見られている。父親との関わり（Ｄ９）に関しては、キャリア意識（教育）およびキャリア意識（職業）においてはあまり差が見られなかったが、キャリア意識（人生）には多くの差が見られた。高校生においては、先輩との関わり（Ｄ７）において多くの差が見られている。

これらにより、以下のことが考察可能であると考えられる。

・「読書・小説」「先生との関わり」「新聞・雑誌」「先輩との関わり（高校生のみ）」を自分の将来を考えるうえで重要と考えている者は各キャリア意識が高い
・総合人間科の授業に関しては、キャリア意識（教育）を高めはしないが、キャリア意識（職業）およびキャリア意識（人生）を高める働きがある可能性がある。
・父親との関わりに関しては、キャリア意識（教育）およびキャリア意識（職業）を高めはしないが、キャリア意識（人生）を高める働きがある可能性がある。

(3)高校３年生の総合人間科に対する意識

アンケート用紙Ｄの２、「総合人間科の授業」のところで、高校３年生にのみ次の項目を追加した。

（問）総合人間科を「大いに役立つ」あるいは「少し役立つ」と答えた人に聞きます。何年生の総合人間科が自分の将来を考えるうえで役立ちましたか？

結果は表４に示すとおりである。

表　4

	中学校	高１	高２	高３
男　子	5	10	8	25
女　子	5	13	7	35
合　計	10（9）	23（21）	15（14）	60（56）

複数回答あり　合計欄のカッコ内の数値は％

これによると、「生き方を探る」というテーマで自分の進路を考えている現在の学年が過半数に達しているのは当然としても、高校１年生に約20％の生徒が、さらに中学校段階での研究が最も役立ったと約10％もの生徒が回答しているのは驚きである。中学生時の総合人間科で、学ぶことの意義付けをしっかり生徒に定着させることで、ますますキャリア意識は向上するのではなかろうか。

（文責：佐藤俊樹）

【引用文献】

坂柳恒夫（1992）中学生の進路成熟に関する縦断的研究．愛知教育大学教科センター研究報告第16号．299-308

坂柳恒夫（1993）高校生の進路成熟に関する縦断的研究．愛知教育大学教科センター研究報告第17号．127-136